

## 研究報告

当文学部関係教職員、本学年度刊行の著書を対象

尾形裕康 著

### 「こけむしろ」

—尾形裕康博士業績目録・随想—

小 野 一 成

#### 一 尾形博士とその研究活動

尾形裕康博士は、日本教育史学界の泰斗として、また私学教育界の重鎮として著名な方である。早稲田大学・国士館大学で教鞭を執られた四半世紀の間に教えを受けた人たちの数は、それこそ龐大なものであろう。筆者が親しく知遇を受け、聲咳に接することができるようになったのは、十余年前から現在の職場に勤務して筆者の専攻である生活文化史と教育との接点、すなわち学校生活史の研究を始めてからのことである。従って、今回刊行された尾形博士の業績目録・随想集「こけむしろ」○尾形博士の「紫綬褒章」受章を記念して門人が刊行したの紹介を、多数の直門の方をさし置いて私が執筆するのは誠に僭越の極みというべきかもしれない。けれども同じ歴史学の上に立って教育を見てゆく者の一人として、あえてあつかましいという事は承知の上で、この新著にふれて感じたところを述べて見たと思う。

さて、「こけむしろ」の第一編である尾形博士の業績目録を見てまず感じることとは、その研究の幅がきわめて広いことである。世には往々にして或一つの事柄の研究だけに熱中して、その事についてのみ業績を重ねる人がおり、それはまたそれで結構には違いないが、歴史の研究者としては歴史の基本である

人間の営みについての考察を欠くという点で、いささか問題ではないかと思われる。ところが博士は、「学制」実施とそれに関連する分野をはじめ、「千字文」の研究ならびに千字文が使用されていた江戸時代の学校生活の研究、芸能教育、成年礼の研究と、研究の及ぶ範囲が実に幅広く、また研究の角度がさまざまで、その姿勢が柔軟なのである。このような博士の豊富な学識と広い視野とが総合されることによって、初めて博士の名著「日本教育通史」のような優れた概説書が生れた所以である。

博士の研究業績でもう一つ目立つ点は、歴史上の或る個人に関する研究が比較的多いことである。客観性に欠けるという理由から最近の歴史研究においては個人に関するものは閑却されがちであるが、これは決して好ましい傾向とは思えない。歴史を構成する第一の要素は人間である以上、その研究にはもっと関心がよせられて然るべきである。ことに日本の教育史は早くから常に行政史優先で、個人や人間のいとなみについては甚だ冷淡な傾向にあった。その点博士は、日本の教育史における個人の果たした役割に注目され、その人々についてのきわめて行届いた数多くの研究を発表されている。元来歴史学者で、教育の分野に進まれた博士だからこそその研究である。例えばフルベッキについては博士の研究によって初めて明らかにされた点がきわめて多い。さらに「万葉集古義」の著者、土佐の鹿持雅澄について、多数の研究を公表しておられる。他の学者はどちらかというと「万葉集古義」の著者としての研究に始終してきた。しかるに博士は雅澄の環境面からほりさげての究明である。このような研究姿勢は人間に対する愛情から生れる。個人をマスの一つと見るような研究の進め方からは、こうした成果は絶対に生れてこないのである。

#### 二 鹿持雅澄と「苔蘚」

尾形博士が鹿持雅澄に対して、親愛と崇敬の念を抱いておられることは、こ

の随想集の題名が彼の教育についてのエッセイ集「苔蓆」(天保十三年・一八四二)に因んでいることからよくわかる。収められた随想二十三編のうち、雅澄について書かれたものは表題の「こけむしろ」他四編にもなる。この五つはいずれもよくまとまっているが、中でもやはり「苔蓆」について述べた表題の一編はとりわけ興味深い。

これは「苔蓆」という著作自体を紹介しながら、教育者としての雅澄の思想・教育方法について論じられたものである。碩学必ずしも良教師とは限らないが、雅澄は世間的には誠に不遇な地位にありながら、なお且つ大学者であり、大教育者を兼ねていた。彼は教育の目的を人格形成にありとし、実証的な体験学習の方法を主張し、学問が世間的な權威や流行に押し流されることを戒め、官権による偏向に対して抵抗しつづけた。さらに学問の成果は平明通俗な言葉で表現すべきだ、と説いたという。

尾形博士のこのようなスケッチによつて描き出された雅澄は誠に民主的で、權威に屈せぬ良識ある優れた教育者である。このような教師のあり方を示すことは、現在ならばそれほど珍らしいエッセイとはいえない。ところが、博士がこの「こけむしろ」を発表されたのは第二次大戦末期の昭和十九年十二月○当時、博士は宮内省図書寮編修官であつた戦局は絶望的となり、理論を無視した神がかり論が社会のあらゆる面に横行していた時期なのである。このような時に、このように合理的で民主的な人物についての評論を発表することは、それ自体が時代風潮への痛烈な批判となるのである。筆者は雅澄もさることながら、この一編を著わされた尾形博士の勇氣と時流に屈せぬ精神に敬服させられるのである。

雅澄に学者・教育者としての一つの理想像を見出されるのは、「苔蓆」にあらわれた彼の節を曲げぬ姿勢に、同じく学者・教育者として博士が共鳴されるところが多々あつたからではなからうか。

### 三 師弟関係の分析と尾形博士

教育者としての博士の識見はさらに二十三編の中に収められた「師弟転倒」を読むと一層よくうかがうことができる。これは山東京伝とその弟子の滝沢馬琴の関係を例にとつて、師弟関係のむずかしさについて述べられたものである。馬琴は京伝の弟子として、戯作者としての出発に當つて非常な恩顧を受けたのであるが、やがてその名声が師をしのぐようになると共にその関係は次第に氣まずいものとなり、交際も絶えてしまった。京伝が死去した時も、旧友は蜀山人まで告別に來たのに馬琴は代理をよこしただけであり、書状での見舞もなかつたと関係者から批難された。たしかにこれは社会通念からいえば非常識であり、師弟の間柄からいえばほめられたものではない。

しかしながら博士はこのようないきさつを、表面的なタテマエ論で批判することの無意味さについて述べておられる。師も弟子もどちらも多くの欠点を持つた社会的凡人であつた。行きちがいのあるのも止むを得ない、という態度である。殊に馬琴はどちらかといえば人ざらいなところがあり、きわめて狷介な性格だつたという。従つて、もし馬琴が適度に社交的で、社会人として健全な常識家であつたら、前後二十八年間も要した「八大伝」のような長編は生み出せなかつたであろうと博士は述べておられる。これはきわめて包容力に富んだ考え方である。

師弟関係というのはむずかしいものである。「大概の師匠は弟子の売れることを望んでいる。しかし自分より売れることを望んではない」というのは小説「円朝」の中で作者正岡容が、師弟の微妙な間柄を巧みに表現した言葉であつた。師の枠組に収まらない弟子に対し、師の方はどうしても異端視し、その関係は冷えがちなものである。しかしそうした反逆者が出て来なければ学問の進歩はあり得ない。尾形博士のこの「師弟転倒」は、形式的な師弟関係の偽善

性を指摘して、真の師弟とは何かということを考えさせる。貴重な一編であるといえよう。

#### 四 尾形博士の「千字文」

「こけむしろ」に収められた博士の随想では、このほか「千字文」について述べたものが、短い「手帖」を含めて五編にのぼり、雅澄の研究に並ぶ大きなスペースを占めている。むしろ世間的にいうなら、尾形博士の研究は「千字文」についての方が学界にあまねく知られているのである。雅澄についてもそうであるが、この「千字文」など平素愛着を持たれるテーマについて書かれる時、博士の筆は一層のびのびとして楽しそうな文章となっている。筆者は尾形博士がこの方面の第一人者であることは承知していたが、千字文の研究歴が四十年をかぞえ、数千点のコレクションを所蔵されているという事はこの本を読んで初めて知ることができた。

「千字文」についてふれた五編のうち、一番内容的によくまとめられているのは「わが国の教育と千字文」の一編であろう。これは随想どころか、短いけれどもきちんとまとまった「千字文概論」ともいべき論文である。「千字文」の成立からその特徴、日本への伝来と利用状況、さらに日本国内における発展から日本の教育への貢献度の評価まで、少しも無駄なくよくまとめられている。「千字文」がどういうものか全く知らない者でも、これを一読すれば直ちに理解することができよう。文章もきわめて平明である。まさに雅澄のいう高度の知識を易しい言葉で表現するものである。該博な知識と練達した文章技術、そして何よりも易しく表現して広く読ませようという意欲がなければこのような文章は書けない。正に尾形博士ならではの第一編で、「こけむしろ」の中の第一に推すべきものであらう。

#### 五 その他の随想について

「こけむしろ」の他の随想にも、いろいろと異色な、おもしろいものが少なくない。「一世紀前のアメリカ国民生活」は、博士も指摘されているように、黙って読んでいただけで日本の現在の政治社会に対する鋭い風刺になっている。博士が真面目に英文から訳されていることが、期せずして巧みなパロディとなっているのである。

博士の研究の幅の広さは、「新島先生と明治の学制」（これは尾形博士著「学制成立史の研究」の中でも詳しく論じておられた）のような教育行政、「痛心簿残酷物語」のような教育評価、といった教育畑のものばかりでなく、政友会の策士小泉策太郎が「由比正雪」「織田信長」「明智光秀」といった青少年向きの伝記ものを著作していたことを紹介した「三申と正雪」、江戸の消防夫の生活を考察した「臥煙と鶯」などの随想にもよくあらわれている。どちらも博士の研究系列からいえばやや筋ちがいとも見られるのであるが、その盛り込まれた内容の豊富なことは、博士の博識を物語るものであらう。

#### 六 結び——尾形博士の「こけむしろ」——

以上、いくつかの例を引きながら、博士の業績目録・随想集である「こけむしろ」について、その内容を紹介して来た。このように述べながら感じたことは、博士の視野の広さであり、また歴史研究者として個人に注ぐ眼の暖かさである。直接うかがったことはないが、博士は恐らく知識をただ集めて象牙の塔に籠ってしまいう学者ではなく、それを情熱を以て一般社会に還元するような学者をよしとされるのであらう。随想にとりあげられた鹿持雅澄・新島襄・志賀重昂などは皆そういった人たちである。

雅澄が碩学である上に優れた教育者で、しかも不遇にめげない良き社会人

あったことを、博士はいくつもの随想で紹介しておられる。彼の学者・教育者としての識見はその著「苔蓆」でよくうかがわれるという。しかし尾形博士もまた学者であり教師であり、しかもそのどちらにもすぐれておられる。そして「こけむしろ」の一書は「苔蓆」同様、学者・教育者としての高い識見をよく反映したものである。「苔蓆」を推称される博士が、実はしらすしらすのうちに「こけむしろ」において明治人の気骨を示しておられるのは誠におもしろいまわり合わせであると思う。

（東京都立教育研究所所員）

「こけむしろ」（尾形裕康博士業績目録・随想）〔A5版二〇〇頁非売品・株式会社校倉書房刊〕